

# 内野用水の歴史探訪

「焼砂の曠原」から「山梨のブラジル」へ

県東部を流れる桂川の最上流部・山中湖にほど近い内野村では、国の天然記念物・忍野八海に代表されるうるわしい水環境が知られていますが、かつては農業に向かない土地でした。

村中央部の忍草地区は、その昔は湖の底であったことから農地の水はけが悪く、一方、東部の内野地区は常に水不足に悩まされてきました。先人たちはたゆまぬ努力によりこの困難に対処し、両地区は太平洋戦争中および戦後の食糧不足の時代には「山梨のブラジル」とも称される程の生産力を誇るに至り、貴重な郷土史を構成しています。

今回は、この内野地区の用水路をたどりながら、その歴史を見ていきたいと思います。

## 山中湖からの取水

山中湖から流れ出た桂川を下ると、ほとんど内野地区に水をもたらす「内野用水」へと分岐します。内野用水は大手山を回り込んで「花の都公園」の近くからトンネル区間となり、内野地区に向かいます。かつての水路は、大出山を回り込まず、その地下をトンネルで抜けていましたが、山中湖からの取水量を管理するために湖からの流出は桂川のみとされ、内野用水は桂川から分岐させることになりました。

## 開削の苦難と維持管理の苦難

トンネルの掘削開始は明治4年。資金難による中断を挟みながら明治30年に完成しました。しかし、当時のトンネルはコンクリートなどで固めない「素掘り」のトンネルであったため、関東大震災時など数回の崩落を経験しています。地区ではその度に復旧作業を行ってきましたが、時代が進むにつれ老朽化が進み、昭和53年には取水した用水の60パーセント以上が漏水する事態となり、田植えを中断して漏水箇所をビニールで塞ぐ応急工事を行いました。翌54年にはトンネル内にコルゲート管を敷設し、漏水を食い止めたましたが、トンネルを末永く維持するため、平成15年からトンネル全体をコンクリート構造とする県営事業が実施されました。

## 二つのため池

内野地区の東端、平尾山のふもとには県営事業で造られたため池があり、付近の山から流れ落ちる沢水を溜めています。これが造られる150年以上前、内野地区の人々がため池を造ろうとしたことがありま

渺々(びょうびょう)タル曠原(こうげん)ノ打開今焼砂ノミニ  
テ五穀生セス冬月富士下ノ風烈シク寒氣酷シ稍(よう  
や)ク山足ヲ開テ大豆、蕎麦、小麦等ヲ作ルノミ

歴史書「甲斐国志」には、この地域が寒冷な厳しい気候と貧しい火山灰土により、多大なる苦勞があったことが記されています。

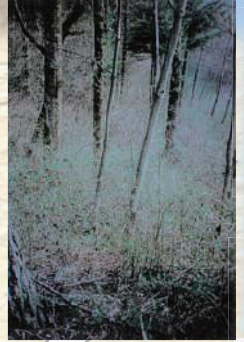
ため池の  
が試みられ  
所は、今は  
に埋もれて

のため池





昭和55年改修記念碑  
土台は工事に用いた  
資材を活用した



かつ  
建た  
した  
筒  
草  
木  
い  
る

現在

開削記念碑  
内野区会事務所前にある



桂川分水  
水門ゲートで水量が調整される



山中湖取水部  
桂川の最上流部でもある



旧水路との合流点  
現在でも確認できる歴史の痕跡だ

### 疏水探訪

このように、私たちの生活に欠かせない食糧や、心を豊かにしてくれる田園風景は、先人達、また、現代を生きる人達のたゆまぬ努力によって支えられている貴重な資産です。書物を紐解き史跡を訪ねると、郷土の偉人は勿論のこと、その背景にいる名前の残らない数多くの人たちの労苦が忍ばれます。疏水を眺めそぞろ歩くと当たり前のように水は流れていきますが、その源や行き先には当たり前でない歴史が繰り広げられています。

### (謝辞)

本稿執筆にあたって、忍野村総務課 天野安夫村誌編纂古文書調査監に多大なるご協力を賜りましたことを御礼申し上げます。

### (参考文献)

- 「忍野村誌」(平成元年版)第一巻、第二巻
- 「わたしたちの忍野村」忍野村教育委員会
- 「忍野における水とのたたかい」季刊 甲斐路 No.82 山梨郷土研究会